

生徒が主体的に取り組む言語活動に向けて

言語活動で思考力、判断力、表現力を伸ばしていくためには、生徒が言語活動に主体的に取り組んでいることが重要となる。
 横浜国立大の高木展郎教授、2校の学校事例を通じた編集部からの提案をまとめた。

思考、判断、表現を深めるために まず主体的に学ぶ意欲を育てる

新課程が全面实施となった2012年、秋から冬にかけて多くの中学校で「言語活動の充実を通じた生徒の思考力、判断力、表現力の育成」に関連する研究発表が行われ、編集部ではいくつかの研究発表に参加させていただいた。

これまでの成果として、「言語活動で授業を捉え直すことで、授業を構造化できるようになった」「学校全体で言語活動の充実に取り組む体制が整ってきた」という声がある一方で、「言語活動を取り入れているが、生徒たちの話し合いが活発にならない」「生徒の振り返りの質が感想レベルからなかなか向上しない」「そもそも、生徒に言語活動に必要な基本的な語彙が不足している」といった課題も聞こえてきた。

そこで、本特集では、生徒の思考力や表現

力を高めていくために、どのような言語活動を行えばよいのか、新課程2年目以降、授業づくりの工夫について考えることにした。

高木展郎教授のインタビュー(P.6)では、「成績に関係なく、どの生徒も考えられる本質を突いた問いの設定」、そして「分からない」ことを「分かる」ようにするのが授業であることを、学級全体、学校全体で共有すること」の大切さが指摘された。

授業づくりの工夫のヒントは、佐賀県小城市立三日月中学校や大阪府高槻市立冠中学校の実践に見られた。

小城市立三日月中学校(P.10)は、生徒を自律的な学びへと導くために、生徒が学ぶ意味や価値、必然性を感じられる「リアルな問い」の設定を重視していた。これを実践するために、全教科共通の「単元カリキュラムモデル」を作成。「感覚的」に問いを設定するのではなく、「リアルな問い」を定義し、問題作成の規準を示して、共通認識を図ろう

と全校で取り組んでいる実践は興味深い。

高槻市立冠中学校(P.17)は、生徒が主体的に言語活動に参加できるよう、1人で学ぶ時間を確保して、どこが「分かり」、どこが「分からない」のかを考えさせた上で、生徒の「分からない」を中心とした授業づくりを行っていた。更に、生徒が恥ずかしがらずに自分の「分からない」を発信できる学級づくりをすることで、生徒が自分で考えたプロセスや気づきを伝え合い、主体的に協力しながら課題解決に取り組む学びを促していた。

生徒の状況を踏まえた上で、言語活動の基礎となる思考力、判断力、表現力の型を身に付けさせることから始めるのは、確かに大切だ。ただ、型をしっかり定着させ、更に深めていくためには、まず、生徒たちが授業に「参加したくなる」あるいは「考えたくて仕方がない」という問いの設定や、学びに向かう環境づくりを整えることが重要なのではないか。